

沖縄戦と現代の平和

網走市立第三中学校3年

齊藤 恵実里



私達を迎えたのは温かい、今までに感じたことのない沖縄の風だった。

私は四日間、市内の中学生と友好都市の神奈川県厚木市の中学生と共に、同じく友好都市である沖縄県糸満市を訪問した。

見たことのない植物、北海道とはまた違った悠々とした雰囲気圧倒され、声が出なかったと同時に、七十八年前にこの豊かな地で戦争があったという事実には驚くばかりだった。まず初めに私達が向かったのは、ガリガリとおおろさんだ。沖縄の伝統的な料理をたくさんいただいていたら、だんだんと緊張の糸がほぐれ、自分の地域などの話をして交流することができた。

二日目は平和祈念公園で久保田さんのお話を聞き、沖縄戦について学んだ。

現在の私たちは努力すれば自分の好きなことができる。だが、それは当たり前のことではない。「平和だから、できる。」と久保田さんが声を大にして教えてくださった。

沖縄戦では「米軍に捕まり殺されるならば死んだほうがいい」という教育が一般常識という名の固定観念になり、多くの方々が自決した。それは集団自決であったり、家族間であつたりと、今ではあまりにも考えられないことが多いのだが、これが「戦争」だ。

このような人を人でなくする戦争をおこさないようにするためには主に三つのことが大切である。一つ目は戦争の歴史を知り、教訓を継承すること。二つ目は人のためになるよう奉仕活動に取り組むこと。三つ目は話し合いを大切にし、平和友好を築くことだ。どれも日常生活で私達が取り組めることばかりだ。

今、戦争経験者の高齢化が進む中で次の世代に伝える役目は今を生きる人全員にある。

先程の三つのうち、一つでもいいので取り入れてみて欲しい。自分の日常に少し変化が加わるのと同時に平和の輪が広がるからだ。

もう一つ忘れて欲しくないことがある。沖縄で自決した少女たちのことを。ひめゆり平和祈念資料館で私は彼女たちの生きた証を目にした。負傷者を看護していたガマで見つかったくしだ。だんだんと手当などが追いつかなくなっていたため最後には使われなくなっていた物だ。それから当時の緊迫した状況、彼女たちの悲しみが伝わってきた。

館内には壁を覆いつくす学徒隊の顔があつた。一人一人の性格などが書かれていたが、中には顔写真がない少女もいて、得も言われぬ気持ちになった。改めて笑顔が消えていく日常が過去にあることを思い知らされた。

三日目はハブ博物館に行った。様々なハブに関する資料や実物のハブを見て沖縄と北海道の生態系の違いに圧倒された。あの威厳のある眼を未だに忘れることができない。それ程の強さがあつた。

琉球ガラス村ではコップ作りをした。自分でガラスを吹いてふくらませて、口を整える。暑いなか、私以上のことをする職人さんを見ながら、久保田さんがおっしゃっていた「平

和だから、できる」という言葉を思い出さずにはいられなかった。

最終日には水族館を見学し、沖縄の海にはどのような魚などの生物がいるのかを全て見られた気がして胸が高鳴った。カラフルな魚が多く、ここでも生態系の違いを実感することができた。

沖縄に行った四日間私は戦争のことを学び、現代との違いに驚いてばかりだった。戦争を体験していない世代としても次の世代に残していくためには、やはり伝える必要があると思った。平和は長く続かない可能性があること、沖縄でどのような体験をして何を見たか、沖縄についてたくさんの人に知ってもらうため地域の人との交流の幅を広げたいと思う。

最後に、交流する機会を作って下さった関係者の皆様、本当にありがとうございました。